《修士論文要旨》

現代における物語の成立

―都市伝説の形成と流布―

高藤史憲*

本稿では都市伝説の形成と流布をテーマとする。

都市伝説とは口承や書承によって主に流布される物語であり、特に近年に生まれたもののことを指すことが多い。「都市伝説」という概念の提唱者はアメリカの民俗学者ジャン・ハロルド・ブルンヴァンであるとされる。ブルンヴァン以前にも当然ながら都市伝説は存在していたが、この概念を発見したのがブルンヴァンというわけである。

「実体としては根拠の無い、（しかし、いかにもありそうな）噂話」が主体となる、都市特有の希薄な人間関係から生み出される物語である。最近ではインターネットやメールの普及により話に尾鰭が付き物語として成長していく。複雑な都市のシステムの中で限られた経験や伝聞が母体となり、誤解や思い込み、勘違いなどから伝達・成長していったものと考えられる。意図的な嘘や冗談から発生したものも含まれることがある。

都市伝説は先行研究も浅く、論文や資料も充分とはいえない。そのため定義づけなども人によって様々である。本稿では諸資料や著者自身の採話経験、ご協力頂いた方の助言等を鑑み、以下の要素を持つものを都市伝説と呼称することにしたい。

1、本当にあったこと、事実であると言われていること。

2、友達の友達や知り合いの知り合いが経験した等という経緯で伝えられており、決して話者本人の直接体験ではないこと。（話の源をたどろうとしても「友達の友達が…」というループに陥り、決して最初の一人にたどり着くことができない）

3、類話、変型（バリエーション）が多数存在すること。

4、いわゆる心霊的、オカルト的な要素を原則として含まないこと。

さて、前記の定義に従い都市伝説とされるもの全般を見てみると、一般に「都市伝説」と呼ばれているものの一部が含まれないことが考えられる。これらは現代妖怪（口裂け女、人面犬、トイレの花子さん等）や実話系怪談（某所に幽霊が出る云々）と呼ぶことが出来よう。

都市伝説・現代妖怪・実話系怪談の三者は複雑に絡み合っており、厳密に分割することは困難である。しかし、赤とオレンジと黄が別の色であるように、これらもやはり別のものとみなすのが妥当である。これについてはSF作家の山本弘氏がSFとホラーとファンタジーの

平成16年度　*文学研究科国文学専攻

違いについて興味深い分類法を提唱しており、ここではそれを援用したい。山本氏の提唱する分類法は次の様なものである。

「幽霊が現れたら悲鳴をあげて逃げ回るのがホラー、幽霊とお友達になるのがファンタジー、幽霊を捕まえて研究するのがＳＦ」（山本弘『トンデモ本？違う、ＳＦだ！』洋泉社、二〇〇四年の前書きによる）

すなわち、次のように言い換えられると考えられる。

「名前や姿形、登場シチュエーション、登場する場所が固定されているのが現代妖怪、（心霊的・オカルト的な要素を含むことが多い）怖い話が実話系怪談、いかにもありそうな伝達経路や前振り、オチがあるのが都市伝説」

また、都市伝説の重要な側面として無視できない要素がある。それは「差別・偏見・（無知や不信に由来する）恐怖」である。都市伝説と称されるものの全てが「差別・偏見・恐怖」の側面を持っているわけでは決して無い。しかし実際の都市伝説を見てみると少なくない物語の背後に「差別・偏見・恐怖」の感情を見て取ることができる例があるのもまた、まぎれもない事実である（これには新しいものへの無知・無理解によるものも含まれる）。また、これらに関係して教訓的な要素（「何々してはいけない。何々すると…」「それみろ、いわんこっちゃない。やめておけばよかったのに…」的なオチ）を持つこともある。

最後に都市伝説の背後にあるものについて少し述べておきたい。都市伝説の背後には差別や偏見、思い込みといったものが見え隠れしている。あまり科学的に妥当な表現とは言い難いかもしれないが、普段表立って現れることのない（できない）「人間の心の闇」「負の感情」といったものが物語という形を借りて噴出してくるもの、それが都市伝説ではないかと考えられる。そう考えれば様々な都市伝説にマイナスイメージ的なエピソードが多いのも納得できるのではないかと思う。

人間社会が続く限り、新しい都市伝説は再生産され続け「人間の心の闇」「負の感情」を秘めた物語が様々なルートで流布しつづけることであろう。